

漆液及び塗膜評価技術の開発
(事後評価)

質問

回答

A委員	品質不安定になることはないのですか？	漆の乾燥具合のバラツキは、人や木の生育地等の条件によってどうしてもばらついてしまいます。
	成分は何が含まれているのですか？	ウルシオール、水分、含窒素物、ゴム質です。重合は酸化重合で、触媒である酵素ラッカーゼの活性度と量が乾燥に影響します。
	成分は他に、どういった特性に影響を与えるのですか？	塗膜の強さ、耐久性はウルシオールの含有率に影響します。ユーザー面からは一定条件下での乾燥とウルシオールの含有率の表示がほしいとの声があります。
	速乾性を出すため何か加えたりしたのですか？	そのようなことはしておりません。乾燥には温度条件、湿度の影響もあります。
	温湿度を単純に上げるだけで乾きが早くなると思うのですが。	温湿度を上げますと、表面だけ先に硬化し、中まで硬化しません。
F委員	評価調書、部長総合評価欄について、適切なフォローを期待と書いてありますが、各業界に提案をした、という意味でとらえてよいのですか？	浄法寺町の品評会にて分析結果などを提示しました。速乾性漆は大野村で来年度から漆スプレー塗装を用いた学校給食器の生産に入る予定です。また装置は大野村に移管しました。
	産総研中部センターの植物成長剤を利用し、漆の増産に役立つかどうか検討してみるのも面白いと思います。	
E委員	他の素材と漆を比較して、特徴やメリットはどういったものがありますか？	工芸品としての漆は生産量は落ちています。しかし環境ホルモン等の問題もあり、天然素材が見直されていますので、そういったところを売りにすれば活路が開けると思います。
B委員	速乾性漆液装置の販売等は考えていないのですか？ 売った場合の取り分はどうなっていますか？	販売を実施すれば、売れる可能性はあると思います。特許は三者で共同出願しています。県としては1/3の所有権を持っています。
	漆液についての相関はどの程度、定量的に予測できるのでしょうか？	分析した結果、寄与率については水分、硬化時間、粘度についてはわかったのですが、その他の性質につきましては漆によってばらつくものですので、そこまではできません。
	全国に向けて、漆性能の標準化といったことはできるのでしょうか？	漆の相関を見て、特性を押さえることができれば、塗膜にした場合の特性をある程度標準化は可能と思われます。それは新規性の面もあります。
	漆の特徴を表示できれば、どこで生産されたものかなどははっきりすると思うのですが？	正確に漆の特徴を把握できれば可能です。しかしJISの品質評価基準がありますが、古いものであるため、JISではそれはできません。
D委員	浄法寺など地元の漆生産だけでまかなえるのですか？ また中国産漆が多くなってきていますが、それでも速乾性漆はできるのですか？	地元の物は少ないので、センターでは中国産漆を使用して行っています。どこの物でも40分程度で乾く漆は作ることができます。
C委員	手作業に比べて、スプレーだと塗る効率が落ちるのではないのでしょうか？	スプレーにより周りに漆液が飛散してしまうのは確かです。しかし、漆塗リコストは原材料費が10%程度にすぎず、ほとんどが手間賃でありますのでコスト的には問題ありません。
F委員	一般品と比べて、速乾性漆の特有の性能などの分析は行ったりしないのですか？(特に耐候性暴露試験など)	UVIに対して漆は弱いので、耐候性については検討が必要だと思われます。今回は塗膜の強度、密着度の試験を行い、一般品と変わらないことは確認しています。